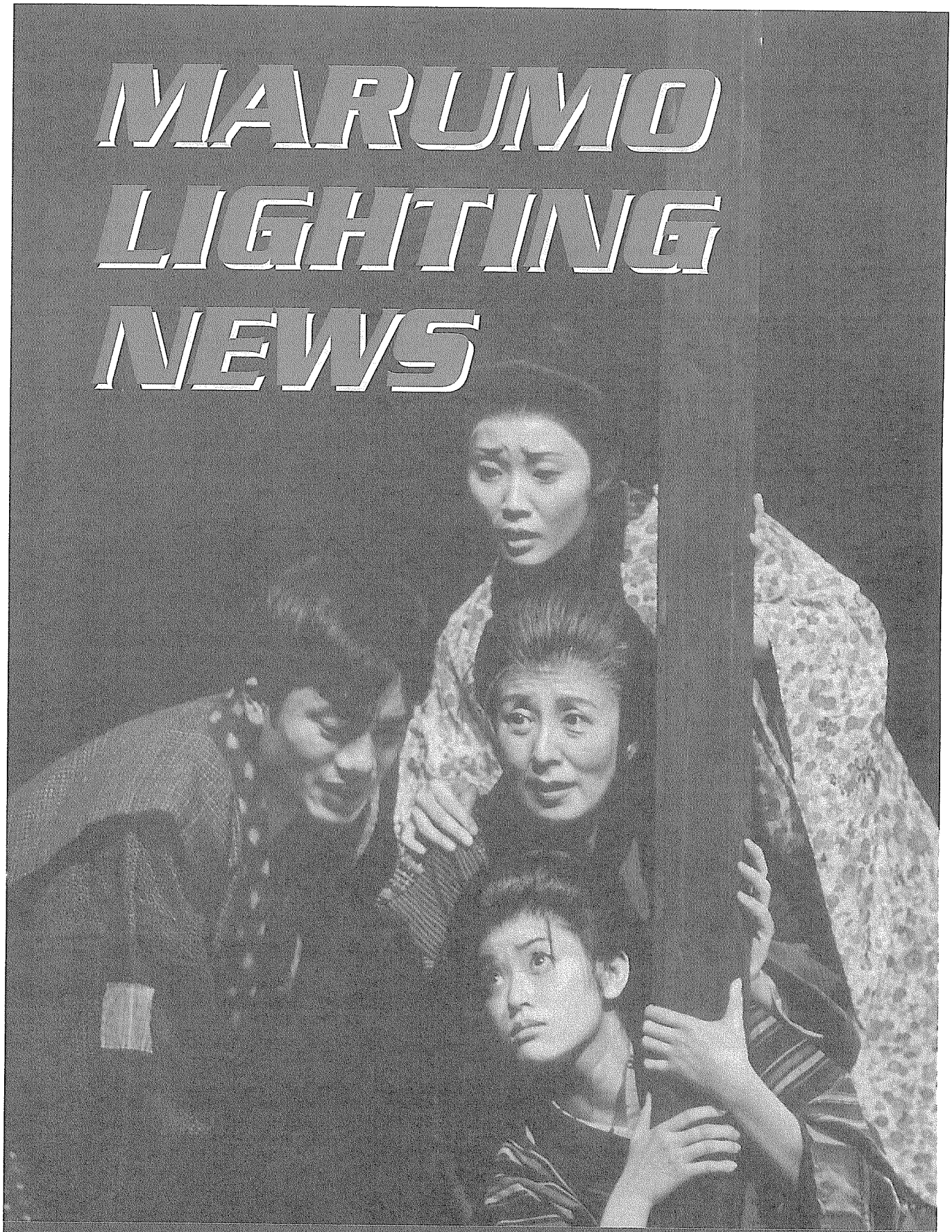
MARUMO LIGHTING NEWS



2001 MAY・ VOL.87

●第46回全国高等学校演劇大会　高校生の舞台づくりをサポートして――清水　恵士・井上　秀則
●RIKURIとコンサート照明――高城　隆一郎　●夜中の明かり――平田　俊子　●LDI 2000に出展

●表紙写真＝こまつ座公演『泣き虫なまいき石川啄木』作：井上ひさし／演出：鈴木裕美／出演：高橋和也、西尾まり、銀粉蝶、細川直美／撮影：谷古宇正彦

第46回全国高等学校演劇大会

高校生の舞台づくりをサポートして

清水　惠士
井上　秀則
（株式会社ステージ・ループ）

事前打ち合わせの重要性

私たちは、静岡県浜松市の浜松市教育文化会館で開催された第46回全国高等学校演劇大会で、会館側のスタッフとして全国から選ばれた代表校の舞台づくりをサポートすることになりました。その時の経験や、上演に至るまでの過程で気がついたことを、今後の舞台づくりの参考までにいくつか述べてみたいと思います。

まず、全国大会の開催に先だって、会場となった浜松市教育文化会館で事前の打ち合わせをおこなったのですが、この打ち合わせが持つ意味について少し考えていただければと思います。

全国には演劇を上演する会館やホールがたくさんありますが、これらの会館・ホールはそれぞれ舞台の広さや機構、照明や音響の設備、常備されている備品、運営のシステムなどが異なっています。

事前の打ち合わせというのは、自分たちが作品を上演する会場の舞台の条件や設備などについてしっかりと把握し、さらにどんな内容の作品を上演するのかということを、上演をサポートしてもらう会館のスタッフに伝えるためのとても大切な機会なのです。

これはわかりきったことのようですが、実際には事前の打ち合わせで確認したことなのに、後から何度も問い合わせがあったり、リハーサル当日になって、事前の打ち合わせとは違った要望が出されたりすることがよくあります。

たとえば、袖幕をどうするのかといったことは、作品を上演する際の舞台条件を決める基本的なことですが、ある学校との打ち合わせでは、第2袖幕だけを使わずに舞台上部に飛ばすことになっていたのが、リハーサル当日になって突然袖幕を全て飛ばして欲しいとの要望が出されました。このように事前の打ち合わせで確認したことが当日になって大きく変更になるのでは、何のための打ち合わせかわかりません。

また、舞台に高さをつくる時に、平台に高足を付けた山台というものをつくりますが、会場となった会館の山台は多少特殊な形になっていました。

通常は、平台に高足をつける時に足の部分が外にはみ出ることはないので、垂直な蹴込みをつくることができます。しかし、この会館の備品の山台は高足を平台の端に付ける形になっているので、足の部分が平台の外側に出るために垂直な蹴込みを付けることができません。

このことは、舞台装置を考える上で重要なことなので、打ち合わせの時に詳しく説明をして、会館の備品の山台で不都合な場合は、自分たちの舞台装置に合った山台を持ち込んでもらうように伝えてありました。

しかし、ある学校では会館の山台を使って、垂直な蹴込みをつくるプランを持って来てしまい、仕込みの最中にそのことがわかりました。

その場で何とか対応をしたのですが、このような基本的な舞台づくりに関する手違いは舞台での安全性にもかかわることですから、打ち合わせでの確認事項や注意事項について、しっかりと理解し、把握してもらうことが必要です。

舞台照明についても、それぞれの出場校の仕込図を見せてもらい、明かりについての要望を聞き、不明な点などを確認するといった事前の打ち合わせをおこな

いました。

全国大会に出場する高校は、すでに県大会、地区大会を経て来ているので、照明プランもしっかりとできあがっていて、打ち合わせそのものはスムーズに進めることができました。

しかし、大会が近くなってくると、ファクシミリや電話などで確認や問い合わせが多数寄せられてきました。その中には、新たに生じた疑問や確認事項もありましたが、打ち合わせで確認済みのことなども含まれていました。おそらく、本番間近になって不安になったりすることもあるのでしょうが、事前の打ち合わせの重要性があまり認識されていないような印象を受けました。

あいまいな部分や、後から再確認しなければならないようなことを無くすためにも、事前打ち合わせの機会を重視し、もっと有効に活用して欲しいと思います。そのためには、事前の打ち合わせに先だって、何を確認するのか、どんな要望を伝えるのか、何を会館のスタッフと相談したいのかなどを整理し、しっかりと準備をしておくことも大切でしょう。

事前の打ち合わせの段階から、会場での舞台づくりが始まっているという意識を持って欲しいと思います。

しっかりとしたイメージを持つ

舞台照明のプランニングについては、自分たちの作品の場面、場面をどういうふうにつくりたいのか、そのイメージをしっかりと持つことが大切だと思います。

ほとんどの演劇部が、普段は舞台照明設備が充分でない学校の講堂や教室で活動していると思いますので、技術的なことはわからないことの方が多いと思います。

舞台照明に関しての知識や技術を持っていると、それだけ表現の幅を拡げることができるわけですから、全くないよりも多少はあった方がよいのですが、スポットライトに触れる機会も少ない現状では難しいだろうと思います。

しかし、知識や技術がないからといって、私たちスタッフとコミュニケーションができないというわけではありません。

自分たちがつくろうとしている場面をどういうイメージでつくりたいのか、そのイメージをしっかりと持ち、それを伝える努力が大切だと思います。

夕焼けのシーンでも、楽しい雰囲気の夕焼けなのか、悲しさや寂しさを表現したい夕焼けなのか、照明担当者や演出担当者がそのイメージを突き詰めて考えて、それを打ち合わせの時に伝えて欲しいと思います。

そうしたイメージがしっかりと私たちに伝えられると、普通の夕焼けはこういう感じだけど、悲しいというイメージを表現するために、この色を加えてみようかといったアドバイスをすることができます。

私たち会館のスタッフが知りたいのは、生徒たちがどんな舞台をつくりたいのか、どんなイメージを持っているのかということです。

技術的なことはサポートすることができます。しかし、何を表現したいのかということを、生徒たちから提示されなければ私たちは手を貸すことができません。

生徒たちが持っている舞台のイメージを基にしながらコミュニケーションをとっていく、そのことが舞台づくりでは何よりも大切だと思います。

シーリングライトの調整

実際の舞台照明の仕込みについては、最初はそれぞれの学校の要望を全て取り入れる方向で考え、次に会館の設備内容に合わせて吊り位置を変更したり、器具の使い回しなどで、できるだけ要望にそった明かりができるように考えて、一枚の総合仕込図にまとめていくことになります。

そうした仕込作業のなかで、今回の大会で最も苦労したのはシーリングライトの扱いでした。

この会館にはシーリングライトが1列しかありません。同じシーリングライトの仕込みで、その日に上演される数校の舞台の明かりをつくることになりますので、学校が変わるごとにシーリングライトの当たりを変えていく必要がありました。

このために、休憩時間を利用し、次の上演校の大道具の仕込みをやっている最中に緞帳をあげて、シーリングライトの当たりを調整する方法を採らざるを得ませんでした。

上演前に、舞台の緞帳があがって仕込みのようすが見えてしまうわけですから、観客にとっては違和感があっただろうと思います。

当然、上演する学校にとっても、仕込み作業の途中を観客が見てしまうわけですから、戸惑いがあっただろうと思います。

実際に、ある学校からは、仕込み途中で緞帳を開けないで、緞帳を降ろしたままでシーリングライトの当たりを調整して欲しいという要望がありました。

緞帳を降ろしたままでは正確な当たりがとれないわけですから、多少当たりがずれることも覚悟の上での判断だった思います。

確かに、緞帳が開くと同時に劇が始まり、舞台装置

もその瞬間から生きてくるわけですから、劇が始まる前に緞帳を開けて仕込み途中の舞台装置が観客の目に触れてしまうのは好ましいことではありません。

しかし、会館の設備の面からも、また一日に数校の舞台作品を同じ仕込みで上演するという条件からも、この方法を選択せざるを得ませんでした。

今回の選択を踏まえながら、今後もさまざまな設備や条件のもとで大会が開催されることを考えると、より最良のかたちで生徒たちの作品を上演できるように環境を整えることも重要な課題のひとつだと思います。

操作卓を使い慣れるために

本番での明かりの操作は基本的に生徒たちがやりましたが、調光室にやってくる担当の生徒たちを見ていると、なぜかみんな余裕がなく、あせっているような印象を受けました。

調光室での作業は慣れないせいもあるのでしょうが、リハーサルの時に調光室に入ってくると、先生から「明かりを入れて」という指示があるまでに、とにかくデータを入れてしまおうとあせって作業をしているようでした。

リハーサルの時間は1時間ありますから、そんなにあわてなくても、ゆっくりとチェックをしながらデータを入れていっても充分に余裕があるはずです。

これはリハーサルの時に、作業をどう進めるかといった進行予定や時間配分がしっかりと決められていないという問題もありますが、操作卓を使い慣れていないことにも原因があるのだろうと思います。

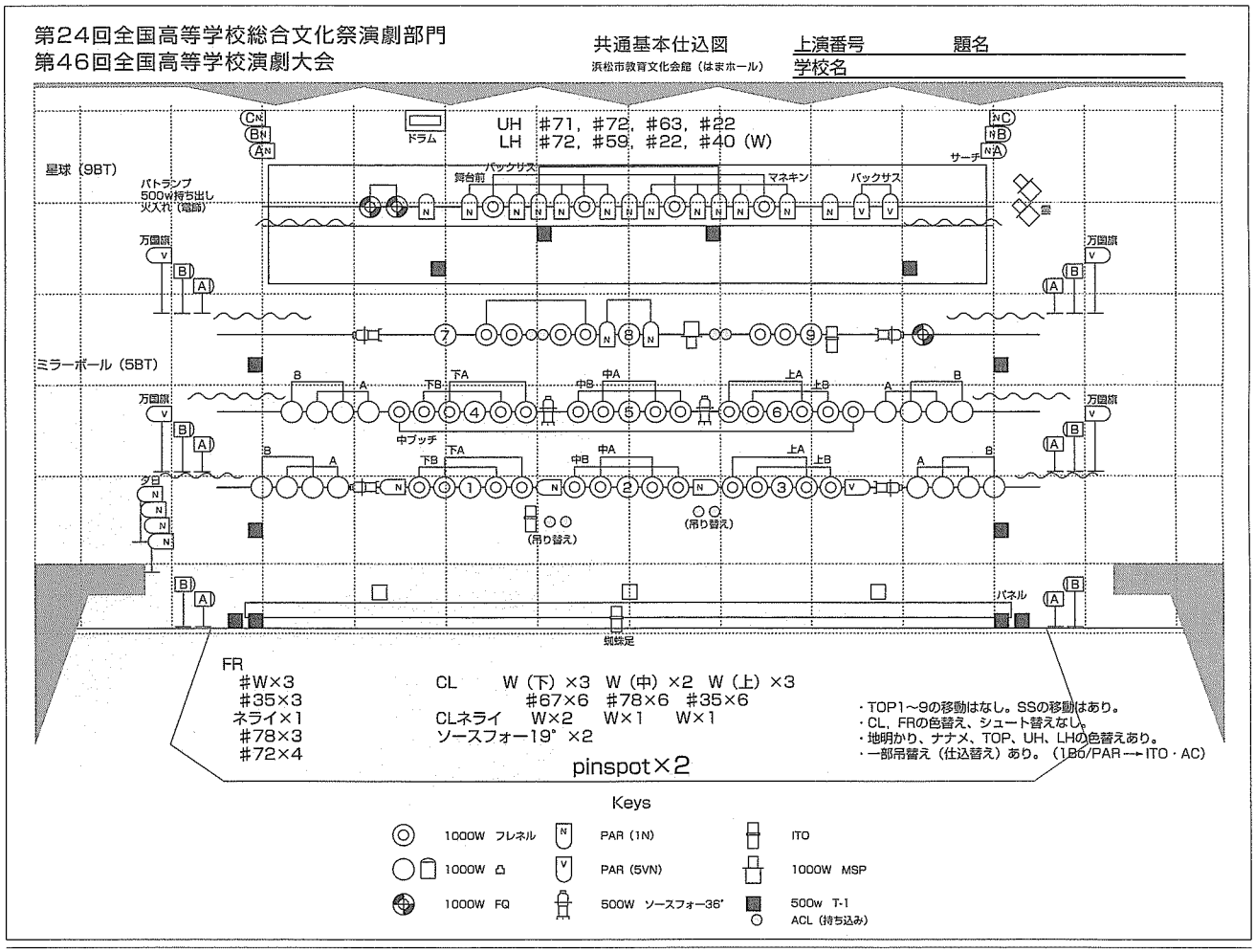
もちろん、事前の打ち合わせの時に、会館の操作卓についての説明は一通りしてあるのですが、やはり充分ではなかったのかもしれません。

それぞれの学校に帰ってから操作卓について確認したり、検討できるように、簡単な操作マニュアルなどを用意して渡してあげればよかったと思いました。

出場校のなかには使い慣れていてマニュアル操作をしていた学校もあるくらいですから、あらかじめ操作卓の機能と操作方法についての情報が伝えられていると、もう少し理解も深まり、落ち着いて作業ができ、操作方法も自分たちの表現に合わせた工夫ができたのではないかと思います。

会館ではマニュアル操作はもちろん、いろいろな要望に対応できる機能を備えた操作卓を使っているので

総合仕込図



すから、ある程度使いこなすための情報を与えた方が良いと思いました。

本番での操作は、きっかけの取り方などはどこの学校もしっかりしており、ゆっくりとしたフェードチェンジも丁寧に操作するなど、自分たちの舞台をとても大切にしている印象を受けただけに、もっと操作卓に身近に触れる機会を増やしてあげればと思いました。

指示系統の確認を

仕込み、リハーサル、本番と、生徒たちが進める作業を見ていて強く感じたのは、指示系統がうまく機能していないということです。

例えば、リハーサルの時に、シーンごとに明かりをつくりながら確認していくのですが、それがスムーズに運ばないのです。調光室でシーン明かりをつくって「これでどうですか」と聞いても、それを見て即座に判断してＯＫを出せる人がいません。このためになかなか次の段階に進まず、時間をロスしてしまっています。時間の使い方がもったいないと思いました。

当たり前のことですが、誰が責任を持って判断をし、指示を出すのか、指示系統をはっきりさせていた方が作業はスムーズに運びます。

特に、生徒たちが中心になって作業を進めている学校は、指示系統がはっきりしないせいか、ぐずぐずになりやすいようです。

先生が客席の中央にいて、次々と指示を出して舞台をつくっていくというスタイルがしっかりできている学校は、仕込みの作業にしてもスムーズに運んでいるようでした。

しかし、それがいいのかどうかというのは、また別の問題があるように思います。先生が中心になりすぎて、生徒たちに細かく指示を出しながら舞台をつくっていくというのも、本来の高校演劇ではなくなるような気がします。

そのあたりのバランスが取れていた学校というのは少なかったように思います。

また、生徒たちの動きも規律がとれていて、非常にてきぱきと作業をやるのはいいのですが、何か体育会系のクラブ活動を見ているような印象も受けました。

先輩と後輩の縦割りの秩序があって、規律良く、てきぱき進める方が時間的には一番速いのですが、一緒に舞台を、演劇を創っていくという雰囲気が希薄になっていくような気がしました。

なかなか兼ね合いが難しいのですが、高校生が力を合わせて、あるところでは試行錯誤しながらひとつひとつ積み重ねて舞台を創って、幕が降りた時にみんなが一緒に達成感や感動を分かち合う、そんなところに高校演劇の魅力があるのではないかと思います。

舞台監督の役割について

最後に、スムーズな作業の進行という点で最も気になったのは、舞台監督の役割についてです。

各学校のスタッフの中に舞台監督が決められているのですが、実際の作業の進め方を見ていると、舞台監督の意味を取り違えているような印象を持ちました。

舞台監督というのは、リハーサルから上演に至るまで、作品の上演中、そして幕が降りて舞台の撤収が終了するまで、その全ての進行を取り仕切る役割を持っています。

リハーサルの時は、大道具の仕込みはもちろん、照明や音響の作業の進捗度をチェックするといった仕事があります。ところが、大道具のセッティングが済むとそれで舞台監督の仕事は終わりと思っているスタッフがいるようです。

仕込みを始める時にも、舞台監督が「これから仕込みを始めます」「これで終了します」といって、全体の進行を管理しなければならないのに、他の生徒に呼ばれてあわてて舞台にくるようなこともありました。

特に、搬入や仕込みでは、どういう順番で何を搬入し、仕込んでいくのかということを、きちんと考えて進行させるのが舞台監督の仕事です。

搬入の際に道具を奥の方から置かずに、手前にどんどん置いていき、人が通れなくなり搬入が滞ってしまっているというのもよく見かける光景ですが、これは舞台監督が指示を的確に出さないためにおきてしまったことです。

仕込みの時も、舞台監督自らが仕込みの作業をやるのではなく、自分は手を出さないで、全体の進行を冷静に見て、的確に指示を出しながら作業を進めていく、それが舞台監督の重要な役割なのです。

舞台監督は全体を見ながら、舞台づくりをスムーズに進めていくためのスタッフだという認識が必要だと思います。

全国大会の舞台は審査がありますので、こうした仕込み作業の手順や進め方ついて、私たち会館のスタッフがどこまでサポートしてよいのか判断の難しいところがありました。事故がないように生徒たちの動きにも目を配りつつ、出場校すべてに公平に対処していくことを第一に考えながら、無事にサポートを終えることができたと思います。

カッタースポットライト

RIKURIとコンサート照明

高城　隆一郎（ライティング ビッグワン株式会社）

コンサート照明にRIKURIを使って

昨年の10月3日から28日まで、東京・日生劇場で行なわれた谷村新司さんのコンサート『日生劇場ロングリサイタル　ザ・シンガー』で、新しいカッタースポットライト「RIKURI」を使った照明プランを手がけました。

この公演で使用したRIKURIは、25度、35度、50度の各機種で、総数60台ほどを主に舞台上部からのサス明かりとして使いました。

灯体デザインからもシャープでスマートな印象を受けたRIKURIですが、実際の舞台で使ってみて、予想以上に優れた明かりの特性を備えたスポットライトだという感想をもちました。そこで日生劇場での経験を踏まえながら、RIKURIについて感じたことをいくつかあげてみたいと思います。

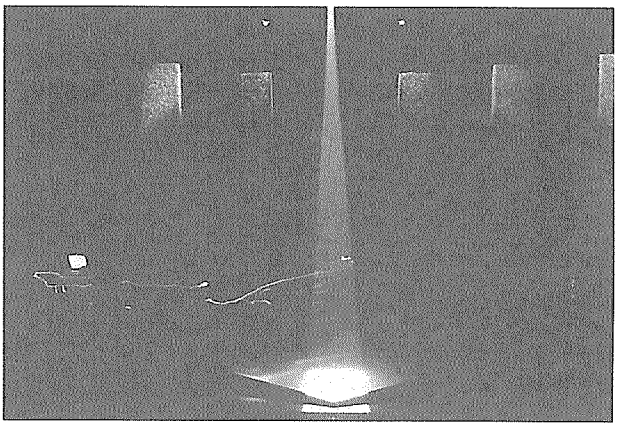
明るくシャープな光

RIKURIの明かりの特徴を一言でいうと、750Wの電球が使用されているのでとても明るいということです。しかも光質に透明感があり、コントラストがクリアで、長方形などの形にエッジを切った時も非常にシャープに決まります。

今回のコンサートでは、バンドエリアの中を舞台中央部から舞台斜め後方に8本の柱がコンピュータ制御によって移動し、回転するという大掛かりな舞台装置が組まれていたので、照明プランとしては柱に当てた光がバンドエリアにもれたりしないような、ハレーションのないシャープな明かりが欲しいと考えていました。ハレーションが多少でもあると、見えて欲しくないところまで舞台装置が見えてしまい、舞台全体が切れ味のないボヤッとした印象になってしまうからです。

実際のプランでは、24尺の高さの舞台装置の上部1間だけをタッチ明かりで、暗い空間の中にくっきりと浮かび上がらせ、RIKURIの持っている光の特性を、十分に生かした明かりをつくり、思った以上の効果をあげることができました。

しかも、こうした明かりはスモークを使った中で出していたのですが、光のシャープさや明るさは従来のプロファイルスポットライトに比較して、強いインパクトを感じるほどの違いがあったと思います。



舞台装置の柱をタッチ明かりで浮かび上がらせる。（舞台装置＝越野幸栄）

クリアなゴボパターンの効果

明るく、シャープな光の特性は、ゴボパターンを使用した際にも実感しました。

今回の公演では、舞台が八百屋（傾斜舞台）になっており、1階の客席からでも舞台床面が見えるようなセットプランになっていました。この舞台床面をどう見せるのかということは、舞台美術や舞台照明を含めた全体のビジュアルプランのなかでも重要なポイントになっていたのです。

そこで照明プランでは、舞台床面をシャープに切った四角い明かりのスペースで構成したり、ゴボパターンを使って木漏れ日の効果などをつくっていくことにしました。

なかでも、ゴボパターンによる木漏れ日の効果は、絵柄が

クリアに出て、とても美しいシーンになっていたと思います。

ゴボパターンによる効果がこれほどクリアに出せるようになると、これからの明かりづくりの大きな戦力になるだろうと思いました。

きれいなフェードイン

RIKURIを使って、明るさやシャープさのほかに強く印象に残ったのが、フェードインが実にきれいにできることです。0から30ボルトでも、0から70ボルトでも、明かりにブレがなくきれいにフェードインすることができます。

従来のプロファイルスポットライトはゆっくりと時間をかけたフェードインの時に、多少明かりにブレが生じることもありました。ところが、今回のコンサートで真暗な舞台にとてもゆっくりと明かりがフェードインしてくるというシーンにRIKURIを使ったのですが、少しの明かりのブレもなく、本当にきれいなフェードインができました。

谷村新司さんの音楽は言葉のニュアンスや情感がとても大事にされ、コンサートの明かりのなかにも、芝居の明かりの要素が要求されます。フェードインなども神経の行き届いた操作が求められます。そうしたきめ細やかな明かりづくりの部分でも、RIKURIはプランナーの要求に十分応えてくれていたと思います。

50度の明かりの広がりとムラのなさ

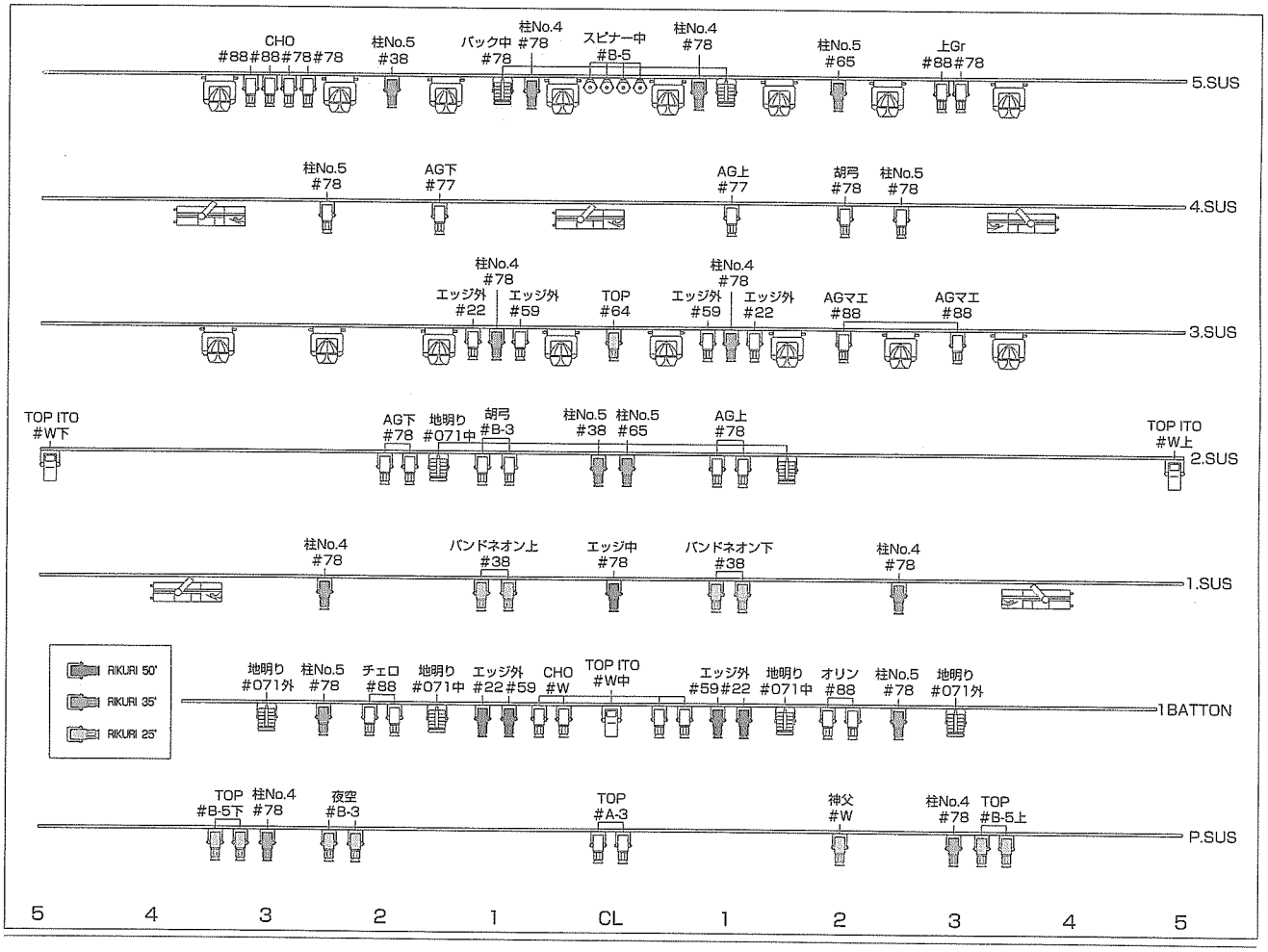
今回使用したRIKURIの機種の中で、予想以上にすばらしかったのが50度のタイプでした。50度のタイプは思っていたより広角に明かりが広がり、しかも広がった光にムラがありません。

これまでのプロファイルスポットライトは広角にした場合、中心部は明るくても、周辺部には明かりのムラが出ることが多く、RIKURIの50度についても明かりのムラを懸念していました。ところが、実際には従来のプロファイルスポットライトよりも光が広がり、しかも広がった光の端の方までムラがなく、きれいに広がっています。

このRIKURIの50度は、従来は2台のスポットライトが必要だったところでも、1台の器具でカバーすることができるので、限られたスペースでの効率的な仕込みを考える時など非常に有効だと思います。

また、一人の人物に対して、光量や明かりの広がりが欲しいために2台のスポットライトを使って明かりを合わせる

『日生劇場ロングリサイタル　ザ・シンガー』の仕込図（部分）



ことがありますが、二つの光源で合わせると、どうしても人物の影も二つになってしまいます。しかし、50度のように広がりのある明るいスポットライトを使うと、1台のスポットライトで明かりをつくることができます。光源が一つだと、人物がどんなに動いても床に落ちる影は一つだけになり、見た目にもきれいな明かりをつくることができます。

この50度のタイプについては、今後いろいろな場面での活用が見られ、需要がとても高くなるだろうと思います。

前明かりとしてのRIKURI

今回は、主にサス明かりとしてRIKURIを使用しましたが、20度のタイプなどはシーリングライトやフロントサイドライトに使っていくと威力を発揮すると思います。

特に、オペラなどのように大勢の出演者が舞台に登場する場合などは、RIKURIの明るくシャープな明かりが、前明かりとして活躍するだろうと思います。

また、野外コンサートなどではトラス仕込みでタッパを15～20mに上げることがありますが、従来のプロファイルスポットライトではタッパが高くなると、どうしても明るさやシャープさの面で思った効果が出ないことがあり、不満が残ることがありました。しかし、20度のタイプのRIKURIを使うことで、離れた位置からでもアーチストやセットに対して明かりをビシッと当てることができるようになり、よりシャープなライティングが展開できるだろうと思います。

使い勝手のよさ

実際の器具の使い勝手については、チーフオペレータや仕込みなどに携わったスタッフにリサーチしたので、それをいくつか紹介します。

まず、カッター羽根が常にスムーズに操作できる点が、使いやすさの一つにあげられていました。従来のプロファイルスポットライトは長時間使用して熱をもってくると、カッター羽根を動かしている途中で引っ掛かるような感じでスムーズに動かないことがありましたが、そういったことはなく、常にスムーズに操作できたということです。

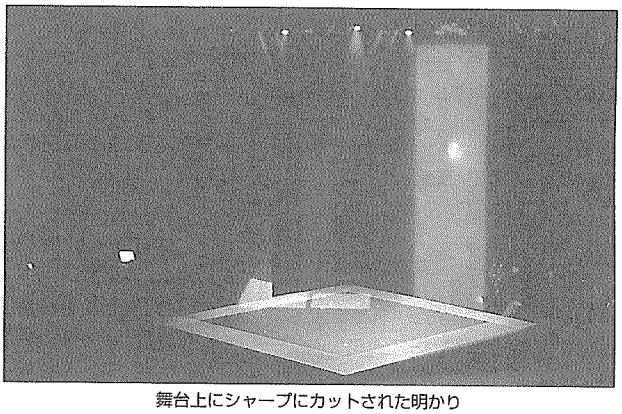
また、カッターやゴボホルダーが360度回転できるという機構は現場ではとても好評でした。

今回のコンサートでは、舞台床面に長方形にカットした光をつくり、それを道に見立てて、アーチストが歩いていくという設定がありました。これまでだと、長方形の方向を決めて一旦光をカットすると、方向を修正したいときには、もう一度方向を変えて光をカットしなければなりませんでした。やり直しに時間がかかっていたのです。

しかし、RIKURIではとりあえず長方形に光をカットしておくと、カッターの部分が回転できるので長方形の方向を任意に変更することができます。これは仕込みに携わっているスタッフにとっては非常にありがたかったということです。

そのほか、ピント調整のための装具が従来のスポットライトより大きく設計されており、しかも、脚立やブリッジで作業をするときに、装具のポジションにすぐ手が届くような形で扱いやすい位置に設定してあり、現場での作業が非常にやりやすかったということでした。

全体として、実際に器具を扱う人のことを考えて、細部まで気を配った設計になっていると感じました。



舞台上にシャープにカットされた明かり

器具構造を活用して

最後に、特徴的なクランクアームを備えた器具の構造についてですが、これはスポットライトをさまざまな角度で使いたいときに、非常に使いやすい構造になっているのではないかと思っています。

たとえば、イントレやラダーを組んだ時に、中間の位置にスポットライトを吊り、下方にはもちろん、上方に向けても、これまで以上に自由に角度を設定することができます。このため、スポットライトとセットが近距離の場合でも、従来より最適なポジションを得ることができるなどのメリットも生まれてきます。

RIKURIは明かりの特徴だけでなく、器具の構造の点でも、その特徴を生かしてさまざまな照明プランの実現に活用できるのではないかと思っています。

（たかぎ　りゅういちろう）

1950年、富山県生まれ。
舞台照明家として数多くのコンサート、演劇の照明プランを手掛ける。
1992年、『SHINJI TANIMURA RECITAL ´92～´93 "BASARA"』の照明プランで、日本照明家協会賞　舞台部門大賞・文部大臣奨励賞を受賞。

夜中の明かり

平田　俊子

（ひらた　としこ）
詩人。劇作家。詩集に『手紙、のち雨』『（お）もろい夫婦』（共に思潮社）など。戯曲集に『開運ラジオ』（毎日新聞社）。今年２月「かもねぎショット」により『視線』が、４月「龍昇企画」により『甘い傷』（文化庁・舞台芸術創作奨励賞受賞）が上演された。

街灯は飽きている。毎日決まった場所に立ち、決まった時間に決まった道を照らすことにうんざりしている。自分の下を通り過ぎるのは、仕事帰りの大人に塾帰りの子供。みんな疲れた肩をしている。疲れた肩を照らしていると自分の肩まで重くなるように街灯は感じた。夜が更けると今度は酔っ払いがやってくる。アルコールのにおいは遠くからでもすぐわかる。街灯はアルコールのにおいが嫌いだ。思わず顔をしかめると、酔っ払いは通りすがりに街灯を蹴飛ばす。街灯の足に青いアザができる。

街灯は大人も子供もあまり好きでない。酔っ払いはなおのこと。といって、真夜中、誰も通らない道をしらじらと照らしていると、寂しくてたまらなくなってくる。自分は何のためにここにいるのだとため息が出てしまう。

疲れた人間は見たくない。寂しい道には立ちたくない。今度生まれてくるときはネオンがいいと街灯は思った。大通りにある華やかな店の入り口で、ぴかぴか光っているネオン。ネオンめざして人々は笑いながらやってきて、踊るような足取りで去っていく。どうせ明かりに生まれるならネオンがいい。ネオンになって派手に輝きたいと街灯は思った。

真夜中、うなだれた街灯の立つ裏道を足音をひそめて散歩する。あたりは小さな二階建の家や古いアパートが並ぶ住宅街。どの部屋もしんと静まって、窓は黒く塗りつぶされている。人の気配のしない道を歩いていると、人類は絶滅したのかと不安になる。確かに人間は多すぎるけれど、絶滅されると少し寂しい。せめて五人ぐらい残っていてほしい。明かりのついた窓を発見すると、あそこに生き残りがいるとわかりほっとする。

川に沿って歩くと小さな橋に出る。十歩で渡り、「＊＊マンション建設反対」の張り紙がある角を曲がると公園だ。ブランコ、すべり台、ジャングルジム。猫のトイレにされないよう、砂場は青いビニールシートで覆われている。ベンチに座って空を見上げる。ブランコに乗って風に吹かれる。花壇には時期はずれのコスモスが咲いている。

コスモスの花には小さな明かりが仕込まれていると思う。だから夜の闇のなかでも輝いて見える。コスモスだけではない。ひまわりや月見草、クロッカス、花という花にはみんな明かりが仕込まれている。明かりの種類は花によって違う。仕込まれた明かりの違いが、それぞれの花の表情となって現れる。

コスモスのむこうを、犬を連れた男がいき過ぎる。前にも何度か見たことがある。見かけるのはいつも夜中で、決まって犬を連れている。男は黒いジャンパーを着ている。犬の目は黒々と濡れている。犬の目には黒い明かりが仕込まれているのだと思う。

夜中はかすかな明かりが浮かび上がる時間だ。深夜の散歩は小さな明かりを見つける旅だ。昼のあいだは見えにくいものが、夜の闇のなかでは静かに瞬く。といって、わたしは好んで旅に出るわけではない。夜中の散歩はｆの電話を待たないための処方箋なのだ。

夜中になるとｆは電話をくれる。そしてわたしたちは二時間話す。わたしの心に明かりが灯る。けれどｆはとても気まぐれ。毎晩のようにかかってきた電話が、ある夜ぱたりとこなくなる。次の日も、その次の日も電話は鳴らない。そのまま十日、二十日と過ぎていく。たまりかねてこちらからかけると「今忙しいから」と乱暴に切られる。明かりが消され、心は闇になる。

ｆのことは忘れよう。ｆは死んでしまった。二度と電話はかかってこない。何度も自分にいい聞かせるが、すぐに忘れられるものではない。ｆの電話番号を手帳から消し、電話コードを手荒く引き抜く。ようやく忘れかけたころ、真夜中、突然電話が鳴る。何もなかったようにわたしたちは話す。次の日も、その次の日も電話はかかる。そういうことを繰り返し、二年以上経ってしまった。

深夜、部屋にいるとｆの電話を待ってしまう。怖い顔で電話をにらんでしまう。けれど電話は黙ったままだ。次第に息が苦しくなる。たまりかねて外に出る。非常階段をおりて寝静まった町に身投げする。

歩いたり、ベンチに座ったり、缶コーヒーを飲んだりしながら時間をつぶす。夜が明けるころ、眠そうな街灯の下を通って部屋に引き返す。いくらｆが夜更かしでも今ごろはベッドのなかだろう。電話はかかってはこないだろう。これで落ち着いて部屋にいられる。そう思いながらドアを開ける。

見まいとするのに、目はすぐに電話を求める。赤い明かりを確認する。明かりが点滅していれば、ｆから電話があった証拠。点滅していなければ、なかった証拠。留守番電話の小さな明かりが、わたしの心を浮き立たせたり、深く沈み込ませたりする。

アメリカ最大のトレード・ショー“LDI 2000”に出展

LDI

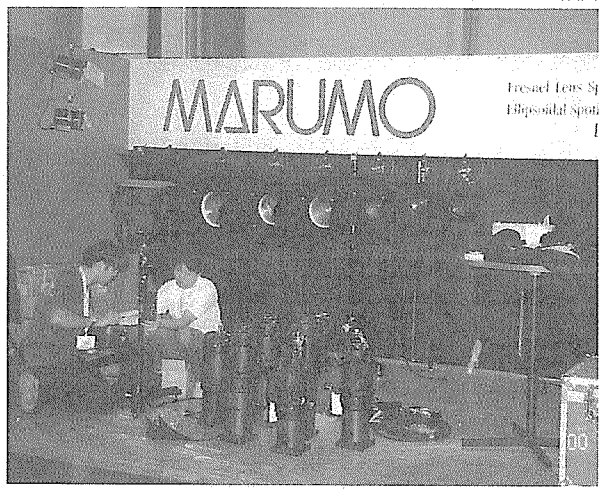
(Lighting Dimension International) とは、照明や音響、特殊効果などエンターテイメントに関わるメーカーが、欧米を中心に世界各国から出展する大規模なトレード・ショーです。

このトレード・ショーでは、ショービジネス界の発展を支えていく最新技術の情報が数多く発信されるため、その開催と出展内容が各方面から関心と注目を集めています。

なかでも、舞台や映像などの演出照明の分野は、このトレード・ショーの中心となるもので、各国のメーカーから世界の動向を反映する新製品や最新技術を取り入れたシステムなどが発表されています。

トレード・ショーは毎年開催されますが、昨年の10月20日から22日にかけて“LDI2000”が、アメリカのネバダ州ラスベガスのサンドエキスポ&コンベンションセンターで開催されました。

会場での展示ブースの設営



Lighting Dimension International 2000での丸茂電機のブース

LDIへの初めての出展

世界規模のトレード・ショー“LDI2000”に、丸茂電機は初めて出展しました。

舞台照明機器のメーカーとして歴史と実績を持つ丸茂電機が、海外、特に欧米の市場に向けて、独自に開発してきた製品をアピールしていくことになったのです。

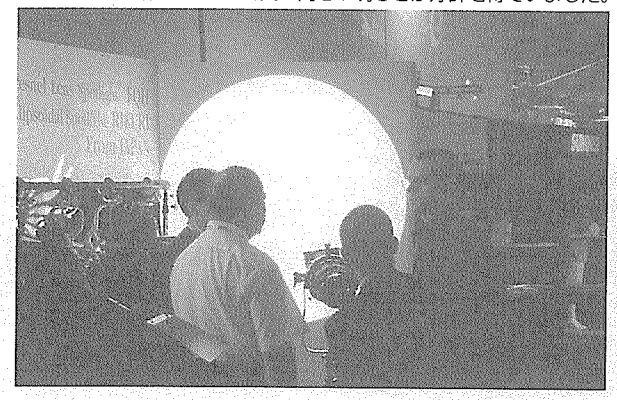
これまで外国の劇団やオペラの公演、また来日したアーチストのコンサートツアーなどで、海外から訪れた照明家が丸茂電機の製品を使い、高い評価を得ていましたが、アメリカを舞台にしての製品の紹介は初めてのことです。

長年にわたって培ってきた丸茂電機の舞台照明の技術が、海外の舞台照明のプロフェッショナルたちにどのように評価されるのか、それは期待と不安が交錯するようなプロジェクトでした。

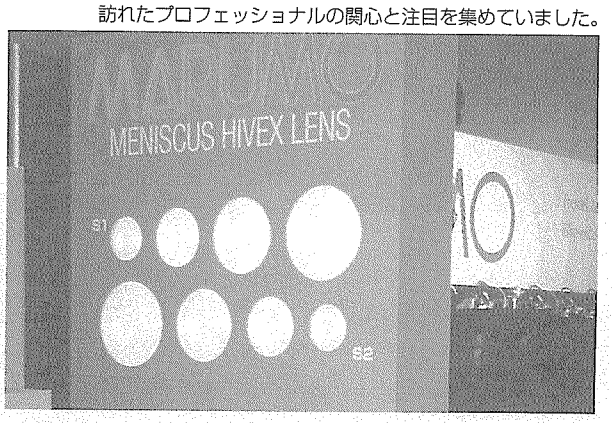
出展製品はFQHとRIKURI

今回のLDIで出展した製品はフレネルレンズスポットライトのFQHシリーズとカッターライトの新製品RIKURI

出展されたメイン製品のひとつであるRIKURIについては、
実際に明かりを出してデモンストレーションをおこないました。
参加者からは、光質の高さや明るさが好評を得ていました。



スポットライトの優れた光質をつくりだす
メニスカスハイベックスレンズなどの丸茂電機の光学技術は、
訪れたプロフェッショナルの関心と注目を集めていました。



です。それに、FQHシリーズに使用されているメニスカスハイベックスレンズも併せて紹介しました。

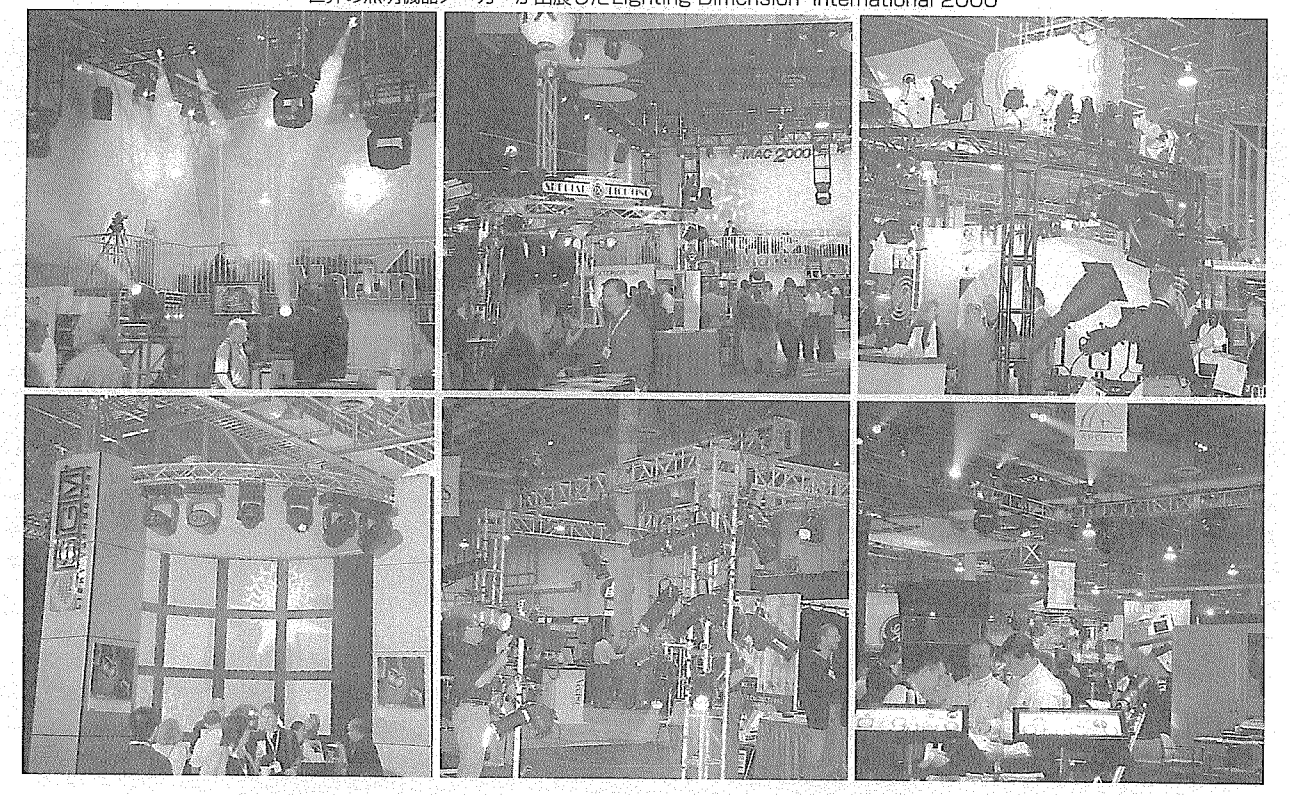
FQHシリーズでは、灯体づくりの丁寧さや、ムラがなくきれいなフラッド明かりの質の高さ、そして薄くて軽いレンズなど、さまざまな面から高い評価が得られました。

また、RIKURIについては、投影用のパネルを用意し、実際に操作しながら、明かりの質と操作性を実感してもらう展示方法を採用したことが好評で、明るさや光質の良さ、さらにスムーズなピント操作など、RIKURIの性能と機能に強い関心が寄せられていました。

新しい製品開発に向けて

初めてのLDI出展でしたが、丸茂電機の製品を実際に手にしての反響も良く、確かな手応えを感じることができ、また、これからの製品開発向けての視野が、大きくひろがってきたことを実感させるトレード・ショーでした。

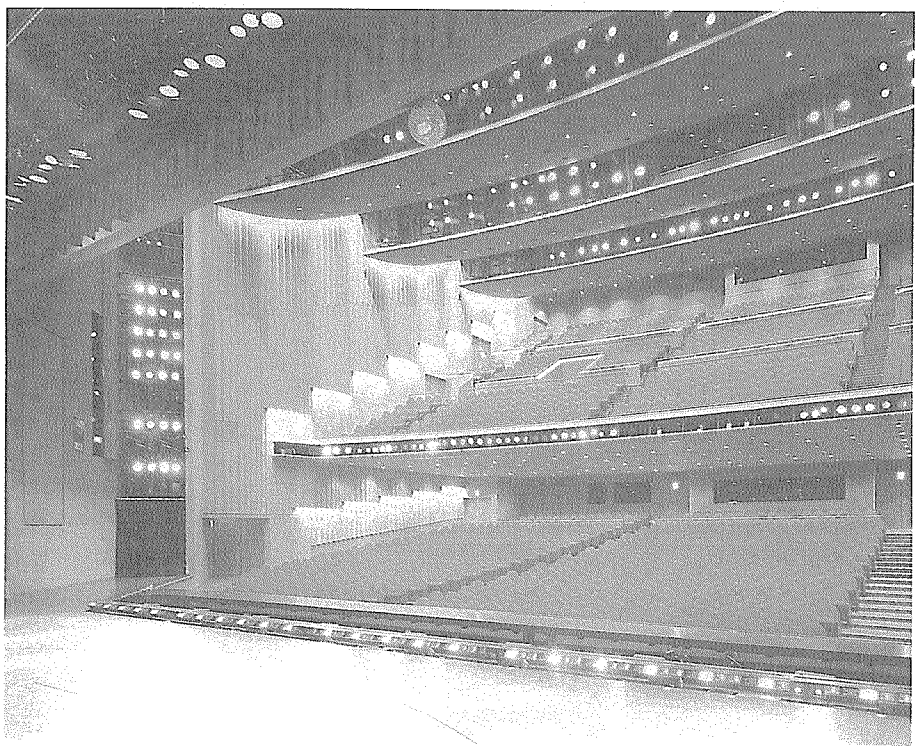
世界の照明機器メーカーが出展したLighting Dimension International 2000

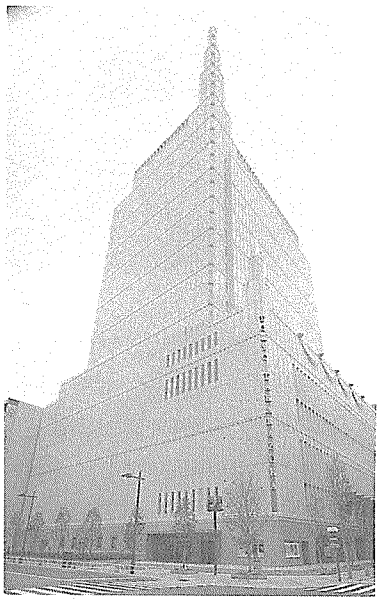


MARUMO LIGHTING DATA SHEET

東京宝塚劇場

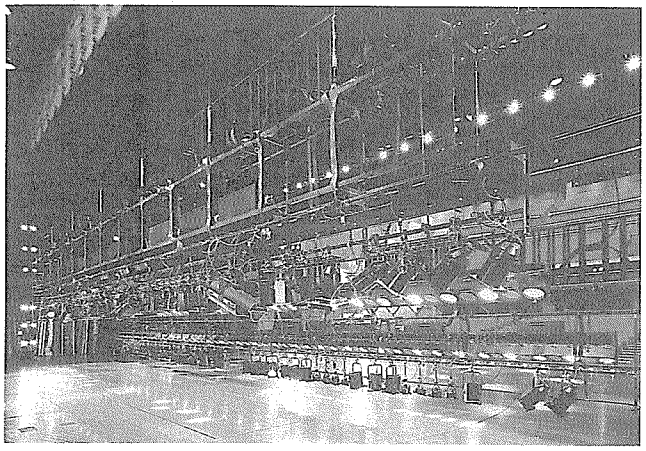
1934年（昭和9年）に、東京唯一の宝塚少女歌劇団の常打ち劇場として開場し、夢やファンタジーにあふれた舞台で数多くのファンを魅了してきた東京宝塚劇場が、新しい世紀を迎え、最新の設備と機能を備えた劇場として生まれ変わりました。新しい劇場には、大階段、銀橋、電飾のすだれなど、舞台の夢を育んでくれる宝塚劇場ならではの舞台機構や設備に加え、舞台照明設備にはマリオネットスター調光操作卓を中心にさまざまな最新技術を駆使した機器が設備され、いっそう華やかで、色彩豊かな物語が紡ぎ出されていきます。





●所在地＝東京都千代田区有楽町 1-1-3
●設計監理＝株式会社竹中工務店
●劇場設計監理＝株式会社アーバン・エース
●設置主体＝阪急電鉄株式会社
●竣工年月＝2000年12月

ライトブリッジ



調光室

編集室では、読者の皆様からの質問や情報を募集しています。ご意見やご要望も併せて、編集室までお寄せください。

●**光の質問箱**／学校などでの舞台づくりのなかで、ぶつかってしまった舞台照明に関する疑問、難問をお寄せください。一緒に解決策を見つけましょう。

●**話題の舞台の照明プランを探る**／印象に残った舞台作品や照明プランをお知らせください。デザイナーから直接話を聞きます。

●**ワークショップ情報**／全国各地でおこなわれているワークショップ情報をお寄せください。編集室で取材し、全国の読者に紹介していきます。

MARUMO LIGHTING NEWS ●『マルモ・ライティング・ニュース』は、無料で皆様にお届けしております。ご希望の方は丸茂電機㈱までお申し込みください。尚、転勤、転居などで住所変更の場合は、その旨ご連絡ください。

●発行：丸茂電機株式会社／●編集：営業部〒101-0041 東京都千代田区神田須田町1-24 ☎03(3252)0321／●発行年月：平成13年5月